

近代仏教

第 19 号

2012年 5 月

<シンポジウム>

- 「十五年戦争と近代仏教」の趣旨 大谷 栄一 (1)
 『時局伝道教化資料』に見る布教方針について
 ——天皇=阿弥陀仏の表現について—— 八木 英哉 (4)
 十五年戦争期における宮本正尊と日本仏教
 Orion KLAUTAU (26)
 もう一つの靖国——戦死者追弔の近現代史—— 白川 哲夫 (40)

<論文>

- 「人間聖徳太子」の誕生——戦中から戦後にかけての
 聖徳太子観の変遷—— 石井 公成 (56)
 清沢満之の宗教哲学における靈魂滅否論について
 ——西洋思想の影響を中心に—— Bernat MARTI-OROVAL (85)
 鎌倉平民仏教中心史観の形成過程
 ——明治における平民主義と仏教史叙述—— 森 新之介 (107)
 「近代と仏教」に参加して 林 淳・吉永進一・大谷栄一 (128)

<新刊紹介>

- フレデリック・ルノワール著/今枝由郎+富樫嚶子訳
 『仏教と西洋の出会い』 末木文美士 (136)
 柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア』 安藤 礼二 (139)
 Duncan Ryūken Williams and Tomoe Moriya, eds.
Issei Buddhism in the Americas.
 Kenneth TANAKA 評/岡田正彦訳 (143)
 岡田正彦著『忘れられた仏教天文学
 ——十九世紀の日本における仏教世界像——』 林 淳 (147)
 長谷川匡俊著『念仏者の福祉思想と実践』 藤森 雄介 (152)
 山本伸裕著『「精神主義」は誰の思想か』 福島 栄寿 (157)
 坂本慎一著『戦前のラジオ放送と松下幸之助』 吉永 進一 (162)
 秋田光彦著『葬式をしない寺 大阪・應典院の挑戦』、
 磯村健太郎著『ルポ仏教、貧困・自殺に挑む』 白波瀬達也 (165)
 末木文美士編『新アジア仏教史』「14 日本IV 近代国家と仏教」、
 「15 日本V 現代仏教の可能性」 小川原正道 (169)
 <彙報> (174)

十五年戦争期における宮本正尊と日本仏教

オリオンクラウタウ
Orion KLAUTAU

一 はじめに

満州事変以降、多くの仏教者は超国家主義の動向に追随し、アジア他国への侵略などを呼びかけるような、より積極的な語りを展開するようになった。そこには宗派間の差や特徴もあるにせよ、宗門が人事や思想のレベルで「大日本帝国」を支持したことは、今では常識となっている。言うまでもなく、そのような傾向は明治後期から既に存在したが、昭和期にそれが強まり、教義の再編成を促すような試みも現れた。敗戦後、かかる思想的営為は「戦時教学」という用語のもとで相対化され、仏教者の戦争責任などの問題を考える上でその内容が問われるようになった。無論「戦時教学」というターム自体は戦時中にみられたが、「大日本帝国」の崩壊後それがほぼ否定的な意味で用いられるようになった事実はその相対化を物語っている。

こうして、「戦後社会」の枠組で自己を位置づけることを目指し、遅かれ早かれ日本列島の伝統宗門は「戦争責任」を償うべく、戦時中における自らの有様を批判的に捉えるようになった。周知の通りそれは必ずしもスムーズに進め

られた事業ではなく、教団内の葛藤などを乗り越えてのことである（「日本仏教」のいわば、倫理的基盤の欠如を訴えた市川白弦「一九〇二〜八六」の研究などはその好例であろう⁽²⁾）。しかし「宗教者」とは異なる次元で、昭和前期に「仏教」と「国家」を掲げたもう一連の思想家が存在した。それはすなわち、本稿の主題となる宮本正尊（一八九三〜一九八三）のような帝国大学系の「仏教学者」である。

十五年戦争期、官学の枠組で研究活動を送る者は「国体」の正統的な内容を構築する役目も果たしており、そのコンテキストで国民精神文化研究所や、平泉澄（一八九五〜一九八四）による「皇国史観」は比較的に広く知られている。昆野伸幸⁽³⁾や長谷川亮⁽⁴⁾らが、近年、昭和期における「国体論」の内実を当時の学界との関係において明らかにしているが、少なくとも直接には「国史」の構築のような使命を負わされていなかった仏教学者が、戦時下の言説空間においていかなる役割を果たしたのかといった問題をめぐる研究はほとんど見られない。このような研究動向をふまえ、本稿では、仏教者の「戦争責任」を問うのではなく、「仏教学」なるものを通して国体論の連続と断絶の描写を試みるものである。かかる課題に取り組むべく、筆者は十五年戦争期において東京帝国大学助教授を務めた宮本正尊の思想的営為に焦点を当てることにした。

宮本は新潟県にある真宗大谷派栄恩寺に生まれ、当時の中学校を卒業後、医師になることを目指して千葉市の千葉医学専門学校に入学した。しかし、学生時代に清沢満之門下の多田鼎（一八七五〜一九三七）に出会い、その法話に感激し、仏教研究に専念すべく医学学校を中退する。そのうち大谷大学に入学し、その真宗学科を卒業すると、さらに東京帝国大学（印度哲学科）に入学し、一九二二年に卒業。一九二三年に文部省の在外研究員として英国へ出発し、一九二八年にはオックスフォード大学で博士号（D.Phil.）を取得。同年に帰国し、七月から東京帝国大学助教授に任命される。彼が最も積極的に研究をアウトプットするのは一九三〇年から一九四五年の間であり、十五年戦争の時期とほとんど重なっている。英国留学の時期から「中」の思想に焦点を当てた宮本は、⁽⁵⁾ 积尊の実践と後の「発達仏教」

を連絡するカテゴリとしてそれを把握した。後述するように、宮本によれば「中」とは仏教の「真髓」であると同時に、「大乘仏教」の歴史的展開を語る上で不可欠なキーワード、或いは方法でもあった。⁽⁷⁾

二 過去と未来——「中道思想」と「新鎌倉」

宮本が欧州留学時代から取り組んでいた「中」の課題に関しては、一九三〇年に「根本中の研究——根本中の立場と阿毘達磨の本義」を発表しており、⁽⁹⁾ そのわずか数カ月後の「新鎌倉の創唱」なる論考において「新鎌倉」としての「明治期」を提唱している。⁽¹¹⁾ この「新鎌倉」の主張は彼にとって、「学術的」な問題であったと同時に、仏教界が今後を生き抜くための「実践的」な問題でもあった。宮本による「根本中」の考察と「新鎌倉の創唱」は、動機および内容のレベルで大きく関わっており、彼自身も示すように、同様の枠組で理解すべきである。⁽¹²⁾

宮本によれば、仏教の発達史においては、幾つかの「エポック」が存在するという。すなわち、積尊の覚証と「根本教団」の形成、龍樹の営為による大乘仏教の成立、中国における仏教の受容と変遷（鳩摩羅什、智顛、吉蔵、法蔵の営為）、鎌倉期における「新宗教」の成立、である。⁽¹³⁾ 仏教全体が法然・親鸞・道元・日蓮の仏教に辿り着くための物語として描かれることもまた興味を惹かれるところであるが、今回はまず、「鎌倉」なる「エポック」が彼の現状認識といかに関係しているかについて考えてみたい。

明治維新以降、新政府は「西洋文化の輸入」に迫られ、「新しき日本が生まれた」と宮本は主張する。当初はとにかく、いわゆる外国の導入こそ一大事であり、「新旧折衷」などを考えることが不可能であった。⁽¹⁴⁾ しかし、そういったやむを得ざる交流の末に、その使命を自覚する共同体としての「日本」が成立したと考える宮本は、法然・親鸞・道元・日蓮らの「諸聖」の時代と同じように、「仏教」が自らを「日本仏教」として意識した上で目前の困難を克服

し、更生する「新鎌倉」の時代を迎えるべきことを主張する。⁽¹⁵⁾もとより伝統宗門の「復興」のために、鎌倉期の「新仏教」に倣うべきことを主張する者は明治期からすでに多く存在しており、宮本もその点においては必ずしも特異ではない。⁽¹⁶⁾しかし後述するように、「仏教の日本的自覚」という鎌倉期の要素に重点を置きつつ「仏教学者」が意識的に形成すべき新しい「エポック」としての「新鎌倉」を強調した点に、ある種の獨創性も見出されるかもしれない。

すでに触れた如く、宮本にとって「根本中」とは仏教の思想的展開を捉える觀念であると同時に、今後の発展を図るための鍵でもあった。このように仏教に関する過去の「事実」をよく理解し、来たるべき輝かしい未来のために尽力することを、彼は「専門家」としての「仏教学者」の使命と考えていたのである。⁽¹⁷⁾そして彼は、その過去と未来とを次のように描き出す。

仏教は大陸において思想的なレベルでさまざまな発展を遂げたが、その「實際的適応」は日本への移植によって初めて遂げられた。⁽¹⁸⁾すなわち聖徳太子の事業によって日本に定着した仏教が、鎌倉期にいたりいよいよ日本的なものと⁽¹⁹⁾して完成され、全仏教史における「エポック」を形成する。そして近代日本における「新鎌倉」の確立は、単なる「仏教復興」にとどまらず、欧米列強に対するアジアの「防波堤」としての日本の建設をも念頭に置いたものでもあった。⁽²⁰⁾すなわち日本は、「東洋」にありながらもそのなかに特別な位置を占めており、「西洋文化」を受容してもそれに傾かない。つまりさまざまな潮流の狭間に自らの立場を保持できる——言い換えれば「中道」を歩める——ような日本の建設に対して、⁽²¹⁾仏教学者はその使命を全うしなければならない、ということである。

宮本はこうして、彼独自の「仏教史観」を踏まえた学問の必要性を叫び、「仏教発達の最前線に立つ日本仏教」の担い手たる「日本人」しか実現できない「仏教学」を唱える。⁽²²⁾この方法としての「根本中」、および建設すべき「新鎌倉」という二つの要素は、十五年戦争期における宮本の学問の基本的な型として、時代状況に合わせたバリエーションを伴いながら語り直されていった。例えば、一九三〇年代後半、宮本はそれこそ仏教思想界の動向に乗じて、仏教

の「日本の自覚」における聖徳太子の役割を主張するようになる——もちろん、それ以前にも言及してはいたが、この時期に太子を主題とするような論考の発表も頻繁になる。⁽²³⁾「日本仏教」をめぐる本質的な語りが最も氾濫するこの時期において、⁽²⁴⁾宮本も自論をさらに強調する必要性を感じたことであろう。

三 強まる戦時体制における宮本仏教学の展開

同じ「新鎌倉」論であっても、その内容には若干ながら、変化がみられる。「不動全集」というシリーズの一冊として刊行された『不動心と仏教』（不動全集刊行会、一九四一年二月五日発行）には、鎌倉期と当時のもうひとつ、自覚すべき共通点として、「国難」の問題が描かれる。「蒙古襲来」により、日本人全員は一心になり、国家への尽力を呼びかける日蓮のような仏教者もみられた。「不動心」によって国難を乗り越えた中世人は、言うまでもなく、現在を生きる者が仰ぐべき師として描かれ、「中道」を歩むことの有効性——および日本の仏教者とその思想の定着に果たしてきた役割——が説かれる。⁽²⁵⁾

戦時体制の強化は、宮本における「根本中」の内容の誇張をもたらしたとも言えよう。英国留学時代には釈尊や龍樹の思想に、帰国後には鎌倉期の宗祖の実践に「中」の核心を求めていた彼は、太平洋戦争が開始される直前の著作において、「中道」の顕現を「不動心」に見出そうとする。例えば、国際連盟におけるリットン報告書の採択をめぐる審議の際に、他国に影響されずに「不動」の立場を保った日本の「精神」は、「根本中」や「正法」と同じ枠組で語られる。⁽²⁶⁾出版事業をめぐる当時の困難な状況にも拘らず、宮本は太平洋戦争が開始されてから最も活発に研究書などを発表していく。対米開戦前、わずかに上記の『不動心と仏教』しか発表していなかった宮本は、さっそくその改訂増補版を刊行し（一九四二年九月五日発行）、いずれも大著である『根本中と空』（一九四三年三月、約六〇〇頁）、『大乘

と小乗』(一九四四年八月、約八〇〇頁)、そして博士論文『中道思想及びその発達』(法藏館、一九四四年七月、約一〇〇〇頁)を発表。前者二冊は第一書房から刊行され、「仏教学の根本問題」という全五巻本の第一巻と第三巻をなしていた(予定されていた第二巻『さとりと分別』・第四巻『法と縁起』・第五巻『日本仏教の本質』は、刊行されることはなかった)。

この時期の著作では、それまでの論考よりも強く、中国やインドに対する日本の指導的な役割が述べられ、「大東亜建設」への積極的な呼びかけが行われている。さらに、「大東亜共栄圏」が政府によって次第に強調されると軌を一にするように、宮本はそれまであまり重要視してこなかった「小乗仏教」の問題を正面から取り上げるようになり、「根本中」を通した「大乘」と「小乗」の精神的統一という課題にも取り組むようになる。⁽²⁸⁾この時期における宮本の主張は次に次のことばに集約されている。いわく、「学界と云はず教界と云はず、日本仏教界の先覚指導の位置にある諸彦は、日本朝野に漂ふある種の低迷暗雲不明朗な空気を浄化し、国民各層の摩擦を融合するに足る気前と行ひとを先づ自ら示して、新東亜建設に尽くして欲しい」と。⁽²⁹⁾学位論文の刊行版でさえ、「日本臣民道と中道」という最終編で締められ、臣民の「大道」は「中道の日本的姿」であると規定されているように、こういった特殊日本においてのみ適応可能な「大道」なるものが、仏教における「中道思想」の最高段階であると彼は考えていた。⁽³⁰⁾

一九四五年の日本敗戦後も、宮本は東京帝国大学を離れることなく、そのまま教鞭をとり続けた。しかし、容易に想像できるように、以前のような旺盛な執筆活動は見られず、しばらく沈黙に落ちた。彼が後の回想の中で語るように、戦後の彼はアメリカカ礼賛者へと変身し、「中」についても語り続けはするものの、その内容は大きく変わっていった。ただし、この問題については今後の課題としたい。

四 結びにかえて

本稿は宮本正尊を中心として、十五年戦争期における「日本仏教」をめぐる言説の展開について考察しようとしたものである。宮本は聖徳太子を対象とした印度哲学科の同僚であった花山信勝（一八九八―一九九五）ほど直接的ではないが、彼もひとつの日本仏教論を展開した。⁽³²⁾ただし、筆者がここで主張したいのは、宮本が示した日本仏教像における国体的な性格を糾弾することではなく、彼の仏教学自体が「日本仏教」言説のひとつのバリエーションとして展開されているということである。

例えば、最初から鎌倉期の「新興宗教」を全仏教の頂点として示した彼は、その『常識』を踏まえて、「根本仏教」や「大乘仏教」の成立史をいわば「鎌倉」の前史として描き出した。かくて本来、「日本仏教」とは無関係に語り得るはずの「印度仏教」や「中国仏教」は、「親鸞聖人」や「道元禪師」に還元され、彼らにたどり着くまでの筋書として語られる——宮本が、「大乘は元来小乗を超越したのであるが、鎌倉仏教は已に大乘を超越しつつあったのである」⁽³³⁾と断言しえた背景には、このような歴史観が存在していた。「大東亜共栄圏」の主張によって、従来 of 政治空間が次第に拡大していくにつれて、「日本仏教」という言説空間も同様に、日本・中国・朝鮮といった「東亜」から、東南・南アジアを含む「大東亜」へと拡大し、「大乘」のみならず、「小乗」もまた包括しなければならなくなっていた。宮本が、「中」なる根本観念を通して「小乗」と「大乘」の統合に尽力したのは、まさにこのような要請に因應するための必然的なものであったと言えよう。

註

- (1) 明治および大正期における「日本仏教」言説の展開については、拙稿「日本仏教」の誕生——村上專精とその学問的営為を中心に」（『日本思想史研究』第四二号、二〇一〇年）および「大正期における日本仏教論の展開——高橋順次郎の思想的研究・序説」（『日本思想史学』第四二号、二〇一〇年）を参照されたい。
- (2) 例えば、『仏教者の戦争責任』（春秋社、一九七〇年）や『日本ファシズム下の宗教』（エヌエス出版会、一九七五年）。市川思想とその評価について、Christopher Ives (*Imperial-Way Zen: Ichikawa Hakugen's Critique and Lingering Questions for Buddhist Ethics*, Honolulu: University of Hawaii Press, 2009) の成果がある。
- (3) 昆野伸幸『近代日本の国体論——「皇国史観」再考』（べりかん社、二〇〇八年）。
- (4) 長谷川亮一『皇国史観』という問題』（白澤社「現代書館」、二〇〇八年）。
- (5) 伝記的な情報に関しては、宮本正尊博士仏教学論集刊行会・編『仏教学の根本問題——宮本正尊博士仏教学論集』（春秋社、一九八五年）および宮本正尊先生を偲ぶ会・編『宮本正尊博士の世界——人と思想』（中山書房仏書林、一九九九年）が参考になる。
- (6) 宮本は“The Study of Nagarjuna: Mahayana Buddhism with Special Reference to Nagarjuna Philosophy” (D. Phil. Thesis, 1928) および“Translation of the Chung-lun, Pingala's Commentary on the Madhyamaka-*karika*” (D. Phil. Thesis, 1928) という二本の論文によってオックスフォード大学にて学位を取得。彼の留学時代については、平川彰「宮本正尊先生の仏教学」（前掲『宮本正尊博士の世界』、七二九〜七五五頁）を参照した。
- (7) 「……印度及び支那の初期中期大乘仏教に於ける代表的学者に就て、その独自性を明かにしつつも、それに共通普遍なる思惟法則の存することを根本中の立場よりして明瞭ならしめんと欲する。また純一大乗の相統と云はるゝ日本仏教しかも特に鎌倉の新宗教の如きは、かゝる根本中の立場より考察せぬ場合には、これを学的に仏教の根本的真髄を得ておるものであると論証するに多くの困難を伴ふことであらう」（宮本正尊「根本中の研究——根本中の立場と阿毘達磨の本義」東京帝国大学宗教学講座創設廿五年記念会編『宗教学論集』同文館、一九三〇年五月、四三—四五頁）。
- (8) 例えば、註(6)にあげられているオックスフォード大学提出の学位論文。
- (9) 書誌情報に関しては、註(7)を参照。

(10) 宮本正尊「仏教の發達と『新鎌倉』の創唱」(宗教研究編輯部『現代宗教批判』同文館、一九三〇年一月)が最初であるが、宮本「仏教發達と『新鎌倉』の意義——新興宗教の方向規定のために」(『是眞』創刊号、一九三〇年二月)や、同「仏教發達と『新鎌倉』の創唱」(大谷大学三為会編『調和の饗宴——佐々木月樵先生追悼記念講演集』一生堂書店、一九三三年三月)にも同論が展開されている。

(11) 「予はかく鎌倉期を見、明治期の意義を考へて居るのであるが、日本の文化は近き将来に如何しても第二の鎌倉の出現を喚起して居ると思ふておる。予はこれを『新鎌倉』の出現と名付けて居るのであるが、明治はその第一歩を着地したものと見得る」(前掲「仏教發達と『新鎌倉』の意義」一九三〇年二月、三三—三三頁)。

(12) 例えば、前掲「仏教發達と『新鎌倉』の意義」三七頁を参照。

(13) 「仏教の發達の各時代に亘りて夫々の特徴が示されてあるが、そのうち仏陀の覺証及び実践行化が基本をなしてをる根本教団・龍樹に代表せしめらるゝ大乘仏教創唱時代・鳩摩羅什 Kumārajīva の龍樹著作の翻譯及び智顛吉藏の天台三論唱說時代・法藏の奘相縁起西系相成時代・日本仏教の鎌倉時代を以つて最も重要なエポックを為すものと考へる」(前掲「仏教の發達と『新鎌倉』の創唱」五七頁)。

(14) 「明治維新の大断層地震は全く過去の清算であつて、新しき日本が生れたのである。日本人の實際功利主義がこれを断行せしめたのである。西力外寇の圧迫もあつたのであるが、自ら生きるためその過去の輸入文化を放棄して、新しい文化を以つて代らしめたものである。恩故知新とか新旧折衷など云ふことの余裕などなかつたのである。尤もそれには新旧文化はたゞ新旧の相異と云ふのみでなく、特に自然科学の如き異質文化が中心をなしてをるためである。この異質的文化の対立は東洋西洋・精神文化・手工機械・宗教哲学科学等種々に考察せられるのである」(前掲「仏教の發達と『新鎌倉』の創唱」二八頁)。

(15) 「鎌倉の宗教は……、大地より生へ出して居る。日本の土地及び歴史に即して生れてきて居る。かくてその發生の原因過程に、已に大陸文化に対して独自の面目を保つべき条件を具備して居るのであるが、果して法然・親鸞・道元・日蓮の諸聖に於てその面目が躍如としてをる。これ等の諸聖によりてこそ日本仏教は、輸入模倣學習折衷の域を遙かに超出し得たのである。その生活にその教理にその著作の言語に、特に日本仏教の独自性を發揮して来た。日本仏教と云ふ名は単に日本の国土に移植された異國の華と云ふ意味でもなく、その華がそのまゝ今日迄伝へられたと云ふのではない

- のである。仏教がその宗教的面目を發揮し得たのは、日本の現実主義に植えられたからであり、そこに日本仏教が産み出されたのである。弘法の密教や伝教以下の台密の組織にも已に大陸仏教には求められぬものが閃めいてはをるが、その精華の結実は鎌倉に求めねばならないのである。予が特に鎌倉期をエポックと名くるのは、かゝる思想的根拠に基づくのであって、この根拠こそ仏教を今日迄生かした原動力なのである。この事は鎌倉期とそれ以前の比較関係を論じても明かにされるが、それ以後今日に至る七百年の仏教発達と比較しても版結されるのである……。よく七百年に亘り枝葉繁茂し開花結実の歴史を有した事跡を以つて、そこにその一段落を告げたものと見てよいのである。この一段落の内の条件と欧米の異質的文化輸入の外的機縁とが合して、茲に明治維新の時代に於ける仏教の受難と更生が起るのである。「新鎌倉」と予が名くるもの、黎明に接続するのである」(前掲「仏教の発達と『新鎌倉』の創唱」一九二〇頁)。
- (16) 明治以降、鎌倉期の「新仏教」を活動の基準として捉えるような立場(いわゆる「鎌倉新仏教中心史観」のひとつの基点)に関しては、森新之介「鎌倉平民仏教中心史観の形成過程——明治における平民主義と仏教史叙述」(『近代仏教』第一九号、二〇二二年)および福島栄寿「近代仏教」再考——日本近代仏教史研究と『鎌倉新仏教』論」(『日本仏教総合研究』第一〇号、近刊)が示唆的である。
- (17) 「……私が「専門学としての仏教学」と云ふことを提唱致します所以のものも、明治維新以後の新しき日本文化のうち徐徐に成熟しかゝつて来た仏教研究も、漸くそれ自らの全体的立場を意識しかけて来てをることを諸君に告げたいのであります。私が独りこのことを強調しましても、それは十全なる成熟でないのは明かでありますが、曙光をきざしむる丈の力にはなると存じてをります。真のエポック・メイキングは更に世紀 generations の後に「新鎌倉」として到来するであらうと申上げるのであります。たゞ私はその新鎌倉出現を意識的に期待し、その実現への努力の一石を茲に投じたいと思ひます」(宮本正尊「専門学としての仏教学」『宗教学紀要・東京帝国大学宗教学講座創設二十五年記念』同文館、一九三二年九月、一七三頁)。
- (18) 「印度・支那の大陸に於て窮理弁証せられたる大乘仏教哲学が、その實際的適応地を日本の實際主義の国土に見出したと云ふべきものである」(前掲「仏教の発達と『新鎌倉』の創唱」一七頁)。
- (19) 「日本宗教的目醒めは何と云ふても推古朝の聖徳太子の学問・信念・政治・事業にその黎明を見るべきであるが、これは丁度西半球の島嶼国なる大英帝国のそれに稍々先立つて居るが、殆んど時期を同じくするものと云ふてよいのであ

る。オーガスチンが伝道の足跡を英国に印したのは西紀五九八年であつて、日本ではその数年前に四天王寺の建立があり、また数年後には有名なる太子の十七条憲法が制定せられてをる。しかし日本がその国土民族に独自の宗教的思索を産み出すためには、爾後七百年を要して鎌倉に至らねばならなかつた」(前掲「仏教の發達と『新鎌倉』の創唱」一六頁)。

(20) 「世界戦争以後は特に世界は大西洋中心時代より、太平洋中心時代に移行しつゝありと、暗黙の間に予感せられたる宣言せられておる。このことは已に遠くは西欧の列強が東方政策にスタートせる時に始つてをるのであり、最近に於ては米国の日本開国政策に刺戟せられたる明治維新の大業によつて幕を切つておとされ、日清日露の戦争に深められて行つたと見てよい。世界大戦は米国の擡頭と印度及び支那の独立的自覚を促進せしめた点に於て、益々太平洋中心の意義を鮮明ならしめ、今や思想問題としてよりも事実具体的問題として、更に一步を進め我等の眼前に迫つて来たのである。たゞこの問題に就いては日本は支那印度に対して先頭を切り、また東洋に於ける独立国家として、先づ第一に事実上の威厳を示した。この日本の立場は東西融合に先立つて先づ東西の対蹠強化に役立つものであつて、そのユニークな立場は全く世界歴史のエポックを作るものと認めてよいであらう。これによつて少くとも日本は過去に於ける支那印度及び明治以後に於ける欧米の先進諸国に、その蒙れる恩義の一分を酬ひ得たと云ふてよい。日本は全く膨湃として押し寄せて来た西力東漸の波濤を全身に浴びつゝも、その氾濫の禍を防止したアジアの防波堤の如きものである」(前掲「仏教の發達と『新鎌倉』の創唱」二八頁)。

(21) 「……日本島嶼は文字通り歴史的にも地理的にも東西両洋の波の接合する特異の位置を占めてをるのである……。欧米の人はよく日本の武士道を云々するが、この点日本は世界近史上東西交流の問題に於ては、全く悲壯なる義戦を続けてをる武士の如きものである。その何れとも国情を異にする日本が、何れにより多く近付くか、或は何れにも傾かずして中道を歩み得るか、これも「新鎌倉」に課せられたる課題である」(前掲「仏教の發達と『新鎌倉』の創唱」二九頁)。

(22) 「『仏教学』がその本来の面目を發揮し得るのは、現時の情勢では我が日本の学界において他にないことは、久しく海外に遊べる著者の固く信ずる所であるが、「仏教史観」に至りては尚一層この感を深くするのである。換言すれば、仏教史が真に仏教史として取扱はれるには、それはたゞ日本人の手を俟つてのみ可能であらう。／＼この仏教学の組織と仏

教史観の理論構成とその実践とは、「世界史観」可能への仏教よりする寄与であり、また日本人よりの寄与の随一であらう。而も後者の寄与のうちの甚だ重要なものに属するか或はその唯一なるものであるかもしれない。而て茲には仏教発達の最前線に立つ日本仏教に負はされたる課題が横つて居るのである」(宮本正尊「仏教学と仏教史観」宗教研究編輯部『日本文化と仏教』大東出版社、一九三三年一月、六五頁)。

(23) 例えば、「日本仏教の本質——聖徳太子最澄の一线を中心として」(『日本仏教の研究』仏教研究特輯、一九三八年)、「仏教と日本」(『日本評論』六月号、一九三八年、六五〜七九頁)、「東方仏教」(『宗教学紀要』第五輯、一九三八年)、「仏教と日本精神」(神崎照恵編輯『躍進日本の種々相』(新更全集刊行部、一九四〇年)、「仏教の日本的性格」(財団法人司法保護協会「昭徳」編輯部編『日本文化の性格』文録社、一九四一年)。

(24) 東大系の学者に限って言えば、高橋順次郎「東方の光としての仏教」(大雄閣、一九三四年)、矢吹慶輝『日本精神と日本仏教』(仏教聯合会、一九三四年)、花山信勝『日本仏教の特質』(岩波講座東洋思潮、岩波書店、一九三六年)、辻善之助『日本文化と仏教』(大日本図書、一九三七年)もあげられよう。

(25) 宮本正尊『不動心と仏教』(不動全集刊行会、一九四一年)三〜一六頁。改訂増補版『不動心と仏教——正法国家建設の理想と現実』(有光社、一九四二年九月)。

(26) 「よく日本をして不動なることを得しむる所以のものは、中道の立場であつて、その根本的なものを、予は「根本中」と名づける。根本中の立場は「絶対中の一心」である。この不動の一心によつて掲げられるべき国民理想は、須からく公明正大なる「正法国家の建設」でなければならぬ。正法を説いた『法華経』に「唯だ一乗の法のみ有つて、二も無く亦三も無し。」とあるやうに、道は唯だ一筋である。根本中と新鎌倉とを書いてから約二年にして、遂に来るべきものは来り、起るべきものは起つた。即ち満州事変である。十三対一、四十二対一の「その一の精神」の自覚と勃発とである。かくして識者は日本精神を強調し、当路者は国体の明徴を期した」(前掲『不動心と仏教』「初版」一三〜一四頁)。

(27) 「「中」と「根本」との精神を輝かしい民族の伝統に生かしてゐるわが日本こそは、同じ東亜の思想に生きてゐる中華及びインドと相依り相扶けて、「大東亜建設」を成就し、以て世界の新秩序建設の完遂に邁進せねばならない」(宮本正尊『根本中と空』第一書房、一九四三年三月、三七四頁)。

(28) 「……予の新しく拓いた場面は、大小両乗間のけぢめとつながりとを明らかならしめつつ、根拠に流れてゐる仏教精神の一貫性、言ひ換へれば、仏教的本質を顕揚したことにある。強いて名づけるならば、それは「大小乗を貫通する根本仏教」の問題であり、南北新古の仏教が互に交流し新しき發達を遂げるに足る共通地盤の設定である。即ち支那日本へ發展した東方仏教とセイロン・ビルマ・タイの南方仏教とが握手し得ると同時に、同じ根本理念の下に両者相照らし相勵まし互に改善に力め、向上進歩に志すことで出来るのである。而してそれは大東亜新秩序建設の大業にとり、また新しき世界文運の發達に対し、正しい基盤となり、新しい手懸りとなるのである」(宮本正尊『大乘と小乗』第一書房、一九四四年八月、五―六頁)。

(29) 「明治以後の日本仏教に就いて」(小野清一郎・花山信勝『日本仏教の歴史と理念』明治書院、一九四〇年)五六三―五六四頁。

(30) 「我が日本は臣道・孝道・婦道・武道・剣道・茶道・書道等として、凡てこれ「道」に基かざるはないのである。道は歩く道であつて日常実践である。学と立場も「学の道場」に於て練成して行くべきものである。「中」は忠義心に「道」は日本的なる一切の道を総括する臣民道に極るのである。この大道こそ「中道」の日本的すがたである。而して日本の学徒は、この日本臣民道を東亜の大道、世界の大道たらしむることに、その職責の本分があるのである」(宮本正尊『中道思想及びその發達』法藏館、一九四四年七月、九三―三頁)。

(31) 宮本正尊による回想として、座談会「学問の思いで——宮本博士を囲んで」(『東方学』第四一輯、一九七一年)および対談「現代仏教学の集大成——宮本正尊博士」(『中外日報』一九八三年一〇月二四日、二三二―二二一頁、七―三三頁)を参照。宮本による「中道思想」のいわば、戦後的展開は、例えば一九六三年一月に行われた「中道思想」という題での「進講」に窺うことができる。『在家仏教』(第一〇七号、一九六三年、一六―二四頁)などに収録。

(32) 花山に関しての拙稿「十五年戦争期における日本仏教論とその構造——花山信勝と家永三郎を題材として」(『佛教史學研究』第五三卷第一号、二〇一〇年)を参照。

(33) 前掲『大乘と小乗』一九四四年八月、四三―五頁。

付記 本稿が踏まえる報告は科学研究費補助金の援助を受けており、日本学術振興会外国人特別研究員事業によって行わ

れた研究成果の一部である。本稿を作成するにあたって、駒澤大学の石井公成教授にさまざまな教示をいただいた。記して深謝の意を表する。